のため中止。

新入生セミナー合宿

2008.4.10（木）・11（金）　箱根

新入生セミナー合宿が入学してすぐに行われるようになって、今年で三年目となります。

参加した一年生からは「この合宿を通じて友達と仲良くなることができ、高校生活に対する不安も軽くなった」との声が多く聞かれました。

同窓生シリーズ ⑥⑥

26回生

柳瀬俊泰（やなせとしやす）

プロフィール

洋画家　日展委嘱

1988年、2002年に日展特選。1989年上野の森美術館「大賞展」産経新聞社賞、「日本の自然」文部大臣奨励賞等を受賞。1990年彫刻の森美術館、1995年美ヶ原高原美術館で企画展。上野の森美術館、北海道美幌博物館に作品収蔵。

私が新宿高校に入学した七十年代初めは、まだ旧校舎もあり、学園紛争の余韻も残っていました。新宿高校出身で、母校に戻って教鞭をとられている先生も何人かいらして、教師と生徒の関係も近く感じました。同級生で現在地方の国立大学の教授をしているO君は、体育の時間はほとんど学生服を着て見学で、そのかわりいつも難しそうな本を読んでいて東大に入りましたし、三年間同級だった日君は、受験を優先して修学旅行を欠席、念願の京大に進みました。こう記すと、勉強ばかりしている人の多い進学校だったようですが、そこは多感な高校生のこと、坂本龍一さんが「全部で三十数軒あって、その全部に行った…」というJAZZやROCKの喫茶店も学校の近くにたくさんあって、今は日本を代表する企業に勤める友人の中には、当時日本に入ったばかりのT-REXを真似てブーツを履いて来る人や、放課後の教室でギターを弾いたりトランプをする人など、自由な校風でした。現在の持ち物の制限は分かりませんが、BEATLESの解散が話題になり、私も輸入盤のレコードをよく学校に持っていきました。夏の館山も、当時の友納千葉県知事が高校の先輩であること等を誰かが言っていて、誇りに思ったことを記憶しています。

人数的には、私の時代は早大に行く人が一番多かったのですが、大学を卒業しても企業に勤めずに一人でやっている友人も何人かいます。私自身も高校時代はまだ父（六十年代に日展審査員などを務めた洋画家でした）と同じ道に入ることは決めていませんでした。前述の友納さんだけでなく、各方面に立派な卒業生がいることは、皆さんも御存知の通りですが、画壇にも高校（六中）の先輩で松尾敏男先生（日本芸術院会員）や、故人になりますが角浩先生、秋元清弘先生等日本を代表する画家がいます。

皆さんも高校という人生の中で最も多感でエネルギッシュな時期を、画一的な価値観だけに縛られることなく、感性を磨いて下さい。卒業して三十余年が経過しましたが、新宿を通る度に高校時代のことを思い出します。

私は今、日本芸術院会員の洋画家塗師祥一郎先生が委員長をされている日洋会という会の委員をしているのですが、この原稿も長年会の事務局をして頂いている方のお父上が、高校の先輩であることに端を発しました。「日展」は秋に、この「日洋展」は五月から六月にかけて、いずれも六本木の国立新美術館で展覧会を行っています。丁度この原稿は、日洋展の審査を終えて書いているわけですが、皆さんも是非美術館に足を運んで下さい。漱石が「物と物の関係と三様の人間」というタイトルで、「物と物との関係を明（あきら）める人」「物と物との関係を変化せしむる人」「物と物との関係を味（あじわ）う人」と記していますが、芸術はとても大きなものです。

私事ですが、来春は上野の森美術館・別館のギャラリーで自選展を行う予定です。

編集後記

三年生保護者が受け持つ年度はじめの本誌は、チーム結成から完了までの時間があまりなく短期決戦でした。執筆者の皆様には締め切りまで時間がなく、大変だったかと思います。広報委員もお互い協力し手分けをして取り組んだことで、発行までこぎつけました。広報を担当することで、自分達も少し成長したような気がします。

発行にあたり、ご協力を頂きました皆様に、あらためて感謝申し上げます。

（三年広報委員一同）

R20 古紙配合率20%再生紙を使用
PRINTED WITH SOY INK